

米田 一穂（まいた・かずほ）

1、プロフィール

シベリヤ抑留中の俳句作品は紙縫にし服の縫目に隠して帰還。旧制八戸中学時代に始めた俳句は、動くものは指三本、車椅子の生活という状態にあっても連綿と続け、生命を詩う。

<生没>

1910(明治 43)年3月 29 日 ~ 1994(平成6)年5月6日

<代表作>

句集『起伏地帯』『雉子の綺羅』『影と過去』

<青森との関わり>

三本木村(現十和田市)生まれ。戦後上北郡各地小学校長を務める。青森県文化賞、地域文化功労者賞受賞。

2、作家解説

生涯を掛けた土の開拓とその地の子弟の教育という職を去る時「雉子の綺羅に逢へり教師の終ひの帰路」と詠い、師中村草田男をして絶賛せしめた一穂俳句は、青森県立八戸中学校在学時代、八戸旧派の宗匠互扇楼前田桜曙に入門、長谷川かな女を経て中村草田男という師を得、草田男の理念に到達した俳句芸術の集大成であった。

満州開拓団として渡満、巴蘭甲地開拓地で開拓と教育を続けているうちに、現地召集、終戦、シベリヤに抑留という極限の時も作句を続け、作品を書いた紙は紙縫にして服の縫目に隠して帰還したという俳句への情熱は、草田男によって開花された。しかしいわゆる「萬緑調」(草田男主宰俳誌「萬緑」)と言われるものではなく、最も萬緑調では無いという評価さえある。それだけ自分に対する信念の人でもあり、しかも草田男の教えを実体感として受け止めている最たる俳人でもあ

る。昭和 37 年度萬緑賞受賞、また、49 年には第 20 回角川俳句賞を受賞している。

若い頃からの俳句修行と共に、地域の文化向上に指導力を発揮、十和田市の俳句グループ火山群社を強固なものにし、八戸との交流を深め、青森県俳壇にも大いに貢献した。その功績により平成3年、地域文化功労者文部大臣表彰を受けている。

書、俳画をよくし、その門人からも優秀な俳句作家が育っている。

宿痾が悪化、ついに車椅子の生活となるが、ようやく書く事に動く右手の三本の指に頼って作句を続ける。「車椅子は侏儒の目線草の花」のごとく、悪条件も作品の対象にしてしまったたかさは、第三句集『影と過去』を成す。正に俳句に生きる懸命な姿勢は、一穂俳句の一切を物語るものである。あとがきに「この句集は私の生きて来た証しである。おそらくこれは私の紙碑になるだろう」と記す。

句集はこの外『起伏地帯』『雉子の綺羅』があり、句碑は4基、十和田市及びその周辺にある。

3、資料紹介

○『雉子の綺羅』

図書

1971(昭和 46)年3月 30 日

185mm × 135mm

第2句集。昭和 37 年より 45 年まで「萬緑」誌上に発表し中村草田男より選を受けたものから 500 句を厳選して収録。長年に渡る開拓地での教員生活の悲喜を人間味豊かに詠いあげている。角川源義は「現代の一茶」と評する。俳人協会賞次席となった。